東方片編変

DHMO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方片編変

【Ｎコード】

Ｎ１３２８Ｒ

【作者名】

ＤＨＭＯ

【あらすじ】

同作者の東方魂合変の零れ話を中心に書いていきます。なにかリクエストがあればお答え出来たらいいなぁ

開演（前書き）

取り敢えず挨拶をば

開演

読者の皆様こんにちは。『東方魂合変』の主人公、並びに『幻想慰労庵』の店主をしております、水元鉄生で御座います。

本日はこの東方片編変《を読んで下さり誠にありがとうございます。まだ話は始まってすらいませんが。

この話は『東方魂合変』又それのリメイクである『東方魂在変』、そして『幻想慰労庵』からも零れた話。蛇足です。蛇足です。大事な事だから二度言いました。

本編に紛れ込ませるのもアクが強い、作者の力量不足により話が出来なかったネタを書き散らかす予定だそうです。最近だと魂合変で書けなかったのを中心にしたいとか何とか。へたれた作者ですねぇ。

思いつきで書かれている為、過度な期待は禁物です。それでも良ければどうぞ、作者の駄文・ザ・ワールドへとお進み下さい。

開演（後書き）

はい、次回からは短編集です
殆どの場合は一話完結です。そこんとこ宜しくです
何かリクエストがあれば何時でもどーぞ！

姉妹と保護者（前書き）

ほのぼの、かな？
スカーレッツとの零れ話です。

姉妹と保護者

軽く鼻歌を歌いリズムを取りながら、手に持った菜箸を動かす。

紅魔館のお昼時。久し振りに俺が昼食を作る事になったのだ。

何時もは美鈴か妖精メイドにやらせているのだが、今回は姉妹たっての要望と言う事で俺が駆り出された次第。なしてさ。知らん。

「……こんなものか」

ボウルに入った玉子がよく混ざったのを確認したらそれをフライパンに投入し、コンロ（安心のｍａｄｅ ｉｎ ＫＡＰＰＡ。燃料は妖力だからｅｃｏだよこれは！）を点火させる。

作る料理は玉子焼きとホットサンド、ついでに紅茶とクッキー。栄養バランスなんて分からないが多分緑の食べ物が不足してると言われそうだ。

元から料理のレパートリーが多い訳では無いので単純なものしか作れないが、暇を持て余して磨き上げた調理スキルは一級品だろうと自負している。今なら目を瞑ってキャベツの千切りをしたって指チョンパする事はあるまい。

クッキーは既に焼き上がり、紅茶の準備も出来ている。後もうちょいかなーと思っていると、ベキョッと何かが粉砕された音がした。

「てっしょ～、ま～だ～？」

「……女の子なんだからもうちょっと淑やかさを持て」

そう言う事を口うるさく言うつもりはさらさら無いが、自分が育てたような子がドアをぶち破るような所を見ると流石に言いたくもなる。

そんな親心には全く耳を貸さず俺の首に腕を引っ掛けブラブラとぶら下がっているのは懐かれてるのか嘗められてるのかどっちだ。どっちもか。

「後玉子が焼けたら終わりだから、レミリアと一緒に大人しく待ってろ」

「え～」

「え～ったって、こっちにいても面白い事がある訳じゃねえぞ？」

手伝ってくれる訳では無いようだし、手伝うような事も無い。むしろ邪魔になるであろう。いやレミリアよりはマシか？あっちはよく手伝ってくれるのはいいけど砂糖と片栗粉を間違える事が日常茶飯事だし。

「暇なんだもん」

「そーかい」

「そーだよ」

全体重を首に掛けられてるにも関わらず、あまり息苦しさは感じない。ただフランの体温が背中や首筋に感じるだけだ。

「……やっぱり、もう少し恥じらいを持て」

「？」

いや、なんか気恥ずかしくなった。それだけ。

中庭で日光を堂々と浴びながら談笑する吸血鬼と妖怪。

ん？吸血鬼が日光を浴びるなんて自殺行為じゃねって？何の為に俺の能力があるんだよ。作者だってオリ主チートマジハンパねぇが書きたいんじゃなくてこーゆー面倒臭い設定やらを無視して話を進め

る為に〈粛正しました〉

「……お兄様？目が死んでますよ？」

「いや、ちょっと限界まで試して見ただけだ。気にすんな」

いやぁ、主人公のメタ発言は問題があるよね。度が過ぎると色んな人から粛正を受けそうだ。

それはともかく、三人が囲んでいるテーブルには先程作ったクッキーと三人分のティーカップが置いてある。

昼食を済ませ下らない話でお茶を濁していると、ふとレミリアがこんな事を言った。

「そう言えば、私達と同じ位の妖怪っていたかしら」

「む？」

同じ位……？

「……ルーミアとか？」

「……お兄様、今どこを見てそう判断しました？」

顔を真っ赤にして自分の胸部を隠そうとするレミリア。いや、誰もそんな事はチラリとしか考えて無いって。

「同じくらいの歳って事？」

「そ、そうよフラン！体型的な意味じゃなくてそう言う事を言いたかったんですお兄様！」

「そうならそう言えば良かろうが……」

はて、同じ位ね……妖夢とか橙とかはそれっぽいけど。ルーミアは知らんし、リグル？まだ見てもいないので何とも言えない。

「同じねぇ……ま、妖怪だから五十位は誤差の範囲だろうが、そんなにいないんじゃないか？」

後はミスティアとか大妖精、チルノ……年齢が分かんない奴らばっかだな。

「あ！」

「あ？」

フランが立ち上がり、嬉しそうにこちらを見つめてくる。

「いたよ、私達と同じ位の歳の人！」

「おう、誰だ？」

まるで探偵が犯人を言い当てるように腕を高らかに上げ、振り下ろした指が指していたのは……

「……俺？」

「そーだよ、てっしょー！前に言ってたでしょ？もうすぐ三百にな

るって」

「……あぁ、んな事も言ってたっけ」

如何ね、最近トシで脳がボケちゃってて。

「お姉様は二百五十の誕生日が近いし、ね？」

「いや、そんな風に“ね？”って言われても……」

……そういや俺と幽香って結構歳の差があるんだよな。幽香の歳は怖くて聞いた事無いけど。

「……お、お兄様と……」

「……ん、どうしたレミリア？」

俯いてブツブツ呟きながら高速で首を横に振っている。犬がなんかかお前は。

「じゃあ、お姉様と一番歳が近いのはてっしょーなんだね」

「みたいだな」

他がどうかは知らないが、まぁそうなんだろう。

「……良かったねお姉様」

「え、ちょ、どういう意味よフラン！」

またもや顔全体を紅く染めながら妹を睨みつけるスカーレットデビル。

「だっていっつも言ってたじゃない。お兄様と釣り合いがとれそうなのは私位だっｔ「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

そのまま弾幕ごっこに移行。俺に出来る事は空間結界が壊れないよう注意する位だった。止める？俺が？あれらを？イヤダヨ俺！

「全く……まんまガキだよな」

一時間近く続いた弾幕ごっこはレーヴァティンとグングニルのクロ

スカウンターでドローと言う幕切れになった。お互いのノーガード戦法（一撃食らわせる事しか考えていない、の意）にはおにーさんびっくりだったよ。

「よいしょ、と。やっぱ軽いなー」

肩に掛かる重さは、俺が二百年以上前から知っている重さと変わっていなかった。

姉妹と保護者（後書き）

こんな感じかな？
日常的に弾幕ごっこがあったら大変そうだけどスカーレッツならやってそうだ。

向日葵畑でとらまえて（前書き）

タイトルのネタはどうでもよくて

何故かこれを書き上げるのに2ヶ月近く掛かりました。本っ当にお待たせしました

向日葵畑でとらまえて

太陽の畑

「幻想郷のエリア５１」「天国に一番近い花畑」「獄門島」「ろうごくのまち」「グリーンマイル」「１３階段」「伏魔殿（パンデモニウム）」など、様々な呼び名で幻想郷に広く畏れられて……もとい、親しまれている。実際の所は、花々を手荒に扱わねば主である風見幽香はそこまで攻撃的な態度を取らない筈なのだが、人と妖怪の噂は恐ろしいもので、ありもしないＵＳＣの影がまことしやかに囁かれているのだ。

「そのせいか」

「そのせいね」

「……」

その虚実（？）の影響はいろんな所に出ており、ついさっきにもその被害が現れた。と言っても、被害者は風見幽香ただ一人であるが。

「しかしなぁ、やっぱ幻想郷だと人間のスペック超える奴が多い事多い事」

「そりゃあ何時も妖怪と背中合わせで生きてるんだから、足くらい早くなるでしょ」

「……」

暢気に話している二人に背を向けて立ち尽くす幽香。その顔はなんとも形容しがたい茫然自失な感じであった。

さて、このフラワーマスターに何があったかと言えば至極単純、子供に逃げられただけである。花畑の際で立っていた男の子に挨拶しただけで相手は声にならない叫びを上げて銀色の炭酸飲料男が如く走り去ったらしい。

普通であれば失礼にしか当たらない行為だが、向こうからしてみればＳＡ－Ｘがアイスビームを撒き散らしながら接近して来るのと同義だったんだろう。良くある怪談はこうやって早とちりで逃げ回った者が適当な事を言って広まっていくんじゃあなかろうか。

「まーその内噂も無くなるだろ。タタリでも出るなら別だが風評に害がある訳じゃあるまいし、ほっとこうぜ」

「それが一番ね。下手に親しみやすさでもアピールしようとして博麗が駆り出されたとなったら歴史に残る大馬鹿者になるし」

「そういう時はけーねせんせーに頼むしかあるまいよ。尤も、頼みに行ったら頭突きで記憶を消された、とかなったら笑えないが」

『ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！』

こうやって無神経に話し続ける二人がちゃんと幽香を観察していれば次の瞬間に雷華崩拳でもぶっ放されるのが予測出来たろうに、哀れな事にまともに食らって花畑でスケキヨの真似をする羽目になったのは等しく自業自得だろう。

†　†　†

「何よ……鉄生も紫も馬鹿にして……」

珍しくグチグチ文句を言いながら、足元の石ころを蹴飛ばしながら手頃な木陰に腰を下ろす幽香。怒っている訳では無いのだが、どうにも腹の虫が収まらない様だ。先程の掛け合いにしても、失礼にも逃げていった者に関しても。

それもそうだろう。自身に何も言われる負い目は無い筈であるのに、ああやって馬鹿にされて良い気分な者はいる訳が無い。ましてはUSCと畏れられる存在であるからには、それ相応のS気質があっての事だ。間違ってもMでは無い。多分。恐らく。メイビー。

「……原因は、やっぱりこれか」

胸ポケットから微妙におわん型に歪んだ新聞の切り抜きを取り出し、溜め息を吐く。おそらくは一連の悪性情報の発生源。具現化こそしていないもののコレのお陰で飲血鬼もびっくりな殺気を振り撒く幽香が出来上がってたと言う固有結界とか何それ怖い。

記事の日付は2／15、件のバレンタインの騒動……紙面では「血のバレンタイン」と評されている出来事についてのもの。大まかに言うと八雲紫が風見家にライダーキックをかましてご立腹だった幽香さんが、次の日やってきた閻魔様と激烈な戦闘を繰り広げたとか。

間近で見ていた馬鹿亭主と焼き鳥娘とその具材（生贄）が言うには『ラフレシアとＦ－９１の闘い』又は『クレイジー・ダイヤモンドとハーヴェストの闘い』と分かる様な分からない様な証言を残している。普通分からない。作者も半分位分かってない。

その空前絶後の死合い後、運良く火炙りの刑から逃れられたパパラッチが書き上げた記事が問題のそれである。文文。新聞紙上初めてのＲ指定が付けられかける程の斬新かつ壮絶な内容には渦中の者達は最早呆れるしか無かったが……なにも知らない暴風域直撃の者からしてみれば、それはそれは強烈な内容であったであろう。ＵＳＣの固定概念を生み出し、より根強くしてしまう程に。

「あの烏、なんでまともな記事が書けないのかしら……敢えて書かないならもっとムカつくけど」

間違い無く後者。賢明な読者諸君でなくともコンマ１秒で弾き出されるこの回答（真実）をすぐさま口にしないのは大妖怪同士の信頼があるからだろうか、はたまた憤怒から呆れになり、そこから慈悲に転向するまでに至ったのか。どちらにせよ、射命丸への怒りはそれ程無い様だ。草花を愛するだけに根に持つタイプでは無いとか言うと失笑されるので止めよう。

「……ハァ」

やり場が無く言い様も無い感情を抱えつつ、どこへやら繰り出そうと立ち上がった時

「ん？」

チラッ、と。何かが目の端を掠めているのを敏感に感じ取った。そ

れも数体。直視しようとするのだが、どうにも素早く隠れられてしまう。

「……そこッ！」

目を瞑って集中し、顔の横を通ろうとした所を見事にキャッチ。ガッツポーズを取って喜ぶが、誰も見ていないのに恥ずかしがって止めてしまう。少し咳払いをして、捕まえたその飛行生物を確認してみると

「……妖精？」

手のひらサイズの人型。背には半透明の虫の様な羽。赤の短髪に赤いワンピース。大きさを見る限りチルノや大妖精とは違い、生まれてそれ程年月が立っていない妖精であった。

「なんか、動かないわね」

蚊の様にバチリと叩き潰した訳では無いのだが何故かぐったりしている。全力で飛行していた所を大妖怪の手にぶつかってとらまえられたら普通正気を保ってなんていられないだろう。

「……えい」

「……～～？」

幽香が指で妖精の顔をつつくと、グシグシと寝ぼけ眼（？）を擦りながら起き上がった……かと思えば、すぐさま大の字で寝転がり、本寝体勢に入ってしまった。

「ちょッ、起きないの！？」

「！！」

幽香の声に驚いたのか、目を見開いて文字通り飛び起きた妖精。そのまま裸足で幽香の手のひらに立っているのだが、どうも状況が理解出来ていないご様子。

「……？」

「……」

辺りをキョロキョロ見回す妖精と目が合った瞬間、幽香の脳裏に再び懸案事項が浮上した。

「（……妖精も新聞は読むのかしら？）」

あの烏なら妖精どころか生きとし生ける者皆購読者と思っているのだろう、例え食卓の中だろうが式典中だろうが夜の営みの最中だろうが構わずに新聞を投げ込んでくるのだ。妖精がその余波を食らっていても不思議は無い。

「……」

「……」

そうであるならばこうやって捕まっただけで騒ぎに騒いで逃げ出すのだろうが、意外な事にポカンとしたままである。呆けたままで顎が外れたかの様に口を開け放っていると虫が入りそうだ。

「……こんにちわ」

「！」

一応、挨拶してみる。この手の妖精は大抵話したりは出来ないが、聞いて理解する事は出来る筈。そう思って話し掛けたのだが

「（なんで涙目になっちゃうのよ！？）」

妖精は何故かビクビクして余計に挙動不審になってしまう。手のひらにある筈も無い隠れる所を探す内にへたり込んでしまい、目には若干涙を溜めている。

「！？　！！」

身振り手振りで何かを伝えようとしているが、今一つ伝わり辛い。まるで「食べても美味しくない」と主張するかの動作だが――実際そうだろうが――幽香はそれを感じ取れなかった。

「……」

どうにも対処に困るその行動に幽香は見つめるしかない。鉄生だったらこういう事に関しては上手く対応出来そうなのに、と思いはするが居もしない人に頼る訳にはいかない。

「……ほ、ほら。泣いたりしないの」

「！？　……？」

見るからに竦んでいる妖精の頭に手……を乗せると押し潰す形にな

ってしまうので、指先で撫でてやる。に触れるとビクッと驚いたが、そのままゆっくり撫でていると不思議そうな顔で見上げてくる。

「（鉄生だったらこうしてる……と思うんだけど）」

他称女誑しと呼び声高い夫の行動パターンを熟知している幽香だが、同性にやるどころかこの様な行動自体初めてである。妙な緊張感と気恥ずかしさが入り乱れてしまう。

「〜〜♪」

対する妖精は、危険が無いと分かれば警戒を解いてだらけきっている。とうの昔に震えは収まり、ゼンマイ人形みたくギクシャクとした動きを繰り返す幽香の手の暖かさに身を委ねていた。

立ったままで数分間、見た目は和やかな、しかし一方からしてみれば困惑しかない時間が過ぎていると、幽香の周りにナニカが集まってきている事に気付いた。

「！　〜！」

「な、なに？　なんなの？」

そのナニカとは言わずもがな。手のひらでダレている者と編隊飛行を敢行していた色とりどりの妖精達だ。さっきから一人捕まったのを木陰から見守っていたのだが、和やかなふいんき（何故か変換出来ない）に誘われたのか、赤い妖精から危険が無いと伝わったのか。

「〜？　〜〜」

「！　！」

「～～、～～」

「……♪」

「……やっぱり、分かんないわ」

肩や頭に乗っかってくる妖精達の会話をどうにか解読しようとするが、これだったらあの半自律人形の方が分かり易いと諦める。どうにか分かったのは、この娘達が幽香を無闇に避けたりはしないと言う事だけだ。

だが、それだけでも

「～～、！」

「～～……？」

「……なんともないわよ。ただ、嬉しかっただけ」

この、ちょっと感極まるだけで心配そうに顔を覗き込んでくる子達が、とても愛おしく想えてしまう。

†　†　†

一方、大理不尽パンチの餌食となった二人がいる太陽の畑。

「……八の字、生きてるかー」

「……死んでる」

どうにか上半身を花畑から引っこ抜き肥料になる事は避けられたが、今年一番と言って良い程の攻撃は流石に堪えた様である。二人共々寝転がって全身の痛みを癒すしか無い。

「大体、幽香をからかおうってのがおかしいんだよ。反撃食らったらシャレにならんて分かってんのによー、ったく」

「だったら止めたら良かったじゃないの？　面白がって賛同したのにも罪はあるでしょ」

「いや俺はな、そうやって弄るのにも普段から愛を込めてd」

「なにそれキモい」

「人様が必死扱いて考えた嘘をキモいと一蹴する非道流石妖怪の賢者非道」

「眉一つ動かさずに嘘吐いてんじゃないわよ」

そうこう言っている内に、二人の腹時計はそろそろ昼時を指し示す

頃合いである事を互いに確認する羽目になり、

「……」

「……」

思わず無言で顔を見合わせてしまい、

「……昼飯食うか」

結局、平時と変わらない誘いに乗ってしまう八雲……であれば良かったのだが。

「……ッッッッッしょおォォォォォォォォォォうッッッッ！！」

突如舞い戻ったフラワーマスターに踏み台の刑を処され、またもや意識を地の底へたたき落とされてしまった。哀れな役回りは八雲の名を冠する上では仕方がないのだろうか。

そんな惨状を目の当たりにした鉄生は弔い代わりに憐れみを掛けてやる。

「……あー、用件よりも先に足元のに配慮を「今すぐ五人分のお茶と茶菓子の用意をして！　３０秒以内！！　ついでに服装も整えてウェイターらしく！」暴君ッ！？」

突然の要求に面食らいつつ、理由を聞かずに時を止めて準備をする所は良い忠君乃至下僕になる素質があるのかもしれない水元鉄生。土だらけになった黒袴を何処からか貰ってきた紅執事の服にチェインジし、言われるがまま五人分のカップとクッキーを庭（花畑？）

に置いたテーブルに用意する。

「……人使い荒くなったなぁ……」

湯を沸かしながらふと呟いたその背中は、何時になく哀愁漂うものだったとか。

†　†　†

そして時が動き出してみれば

「……そーか、幽香も遂にロリに目覚めサーセンマジサーセン痛い痛い痛いギブッ、ギブアッー！」

席に着いたのが幽香だけで客の姿が見えないのを鉄生が不審に思い、ティーカップの影に隠れていた妖精を見つけてそんな事を言ってコメカミをヒートエンドさせられていた。

「なによ、私が友達を呼ぶのがそんなにおかしいの？」

「そうとは言っとらん。ただちょいと意外だっただけだ」

確かに、紙面では約６６．６倍（当社比）の恐ろしさに改造されていた風見幽香その人が、よもや花畑で妖精と戯れているなんて意外にも程がある。妖精を友達と呼ぶ所も意表を突くポイントだろう。

「〜〜！　〜〜」

「あ、ほら鉄生。早くお茶のお代わり」

「へーへー」

肉体言語（拳で語る事では無い）でお代わりを要求するちっさい妖精の身体にどうやって紅茶やクッキーが収まっているのか甚だ疑問ではあるが、給仕に従事している身である今現在気にする必要は無いと割り切って茶を注ぐ。

「（当て付けのつもりかどうかは知らんが、なーんで妖精なんだかなぁ。機嫌直してくれたみたいだし、後で訊いてみるかな）」

そんな鉄生の疑問は余所に、妖精達を眺める幽香は、何時もと変わらない笑顔を浮かべていた。

向日葵畑でとらまえて（後書き）

前回と似たような感じ？こまけぇこたぁいいんだよ！……はい、スイマセンでした
次回は何にしようか考えてはいるけれどまた更新は遅くなるかなぁ

幽香の日記（前書き）

東方魂合変のメインヒロイン、風見幽香の日記ですー
と言っても最終章付近からしかないけれど
途中から日記じゃなくなる気がしなくも無いけど誰も気にしない

それから今回、友人の各舞し氏が挿絵を描いて下さいました。俺には勿体無いとしか言い様がありませんとも

幽香の日記

8月5日（晴れ）

今日も鉄生は夕ご飯前に帰ってこなかった。夜遅くになって眠った咲夜をおぶって帰ってきた。

咲夜の修行で遅れたと言っていたけれど、その上着には酒の臭いが僅かについていた。きっと妹紅の屋台にでも行ってたんだろう。嘘をついた罰として、明日は一緒にどこか行くと決めた。絶対そうする。

8月6日（晴れ）

咲夜を寺子屋に行かせて、一日中鉄生を連れ回した。人里の服屋をひやかしたり、甘味処でくっつきながらお団子を食べたり。周りに睨まれててちょっとは驚くかなと思ったけれど、動じずに善哉を食べる鉄生は中々肝が座ってると思った。曰く、『慣れた』とか。

今度は鉄生も恥ずかしがりそうな事を考えておかなきゃ。

8月9日（雨）

久しぶりの雨。流石に雨の日は休みなのか、鉄生も咲夜もベッド

でぐでっとしていた。
一緒にゴロゴロしてて心地良さそうだったけれど、鉄生が咲夜を一度も降ろさなくてちょっとムッとした。三人でゴロゴロしていたら、何時の間にか眠っていた。

8月13日（晴れ）
咲夜の修行もそろそろ大詰めらしい。二人の熱の入れようは半端なものじゃ無い。今日だって、何時もは適当な鉄生が真剣な顔で咲夜に喝を入れてるのが見えた。
何時もあんな顔だったら、もっと格好いいんだけどなー。

8月14日（曇り）
畑で咲夜と鉄生が対決した。最後の最後で手を出しちゃったけど、大人気ない事をする鉄生が悪いんだ。
二人ともあちこちに怪我があったけれど、大きなモノがなくて良かった。
けど、大きな怪我をしてたらどちらかを独占出来たかな？なんちゃって

8月17日（晴れ後雨）
ハイキングに行っていたのに、突然雨に降られてしまった。びしょ濡れで帰り、家族みんなでお風呂に入る事にした。三人で入ると湯船が狭かったけど、その分家族の距離が縮まった、と思う。
……縮まる必要があるくらい、距離なんて無かった、か。

８月２０日（晴れ）
暑い日が続いている。向日葵達も萎れてしまいそうな位で、私も汗が止まらなかった。そんな時、鉄生が地下水を汲み上げて即席のプールを作ってくれた。みんなで疲れ果てるまで泳いで涼を採った。
どうせ暑いなら、明日は博麗神社にでも行こうかしら。あそこなら木陰もあって涼しそうだし。

９月１０日（晴れ）
鉄生に会った。自身は人形だと言っていたけど、私には鉄生本人にしか見えなかった。
口振りも立ち振る舞いも、鉄生だった。
出逢った頃からの思い出を沢山話した。その記憶にも寸分の違いは無くて、とても、嬉しかった。

傘の骨組みを渡して、鉄生は何処かにいった。
きっと鉄生はもう、、■、、
■■■、■、、■■、、、■■■■■、■■■、■
、、■■■、■■、■■■
、■■、■■■、、■■■■■、
、、■■、、■■■、、

■■■■

どれだけ日数が経ったんだろう。傘の布を張ってから、もう寝ているのか起きているのかも分からない。

向日葵達の世話をするだけで、一日の記憶が終わる。

■■■■

日に当たっても実感が湧かない。朝なのか昼なのか、それも分からない。向日葵に水をやっていても、何時の間にか日が落ちていた。

■■■■

咲夜が紅魔館で働く事になったそうだ。わざわざ門番が知らせに来たけれど、私は頷く事しか出来なかった。
……あれ？　何時から咲夜は家にいなかったの？

■■■■
なんで私は向日葵を咲かせ続けているのだろう。この子達には負担になるだけなのに、なんで私は？
こうしていても、鉄生はもう、もう■■■■■

■■■■
違う。向日葵達は、咲いてなきゃいけない。
鉄生は、この子達を褒めてくれた。
この子達がいるから、夏だって実感出来るって。
だから、私は咲かせ続けないと。
鉄生が何時でも帰ってこれる様に。
何時でも、夏に帰ってこれる様に。
そうしないと帰ってこれない。

目印が無いと、鉄生が迷っちゃう。
帰ってこれる様にしないと。
誰かに荒らされちゃ駄目。
ずっと待ってないと。
誰も入れずに、誰も関わらせないようにして。
ずっと、ずっと、待ってないと。

◇◆◇◆◇◆

１１月２３日（雪）
とても綺麗な雪が、向日葵の上に降りてきた。
広い広い向日葵畑に、まんべんなく降り注ぐ雪。覆い隠すのは明日か、まだまだ先か。今夜中にも積もってしまいそうだ。
今日も鉄生は夕ご飯前に帰ってこなかった。何時でも待ってるから、早く帰って来て欲しいな。怒ってるんじゃないか、って、そんな心配しなくていいから。
だから、帰ってきて？
向日葵畑で、ずうっと待ってるから。
誰にもここは入れさせない。鉄生だけを待つから。

◆
◇
◆
◇
◆
◇

何時の頃からか、太陽の畑には季節が無くなった。

何時の頃からか、太陽の畑へと行く者はいなくなった。

何時の頃からか、太陽の畑の時は止まった。

何故なら、季節を変える為の花々が向日葵しかいないから。

何故なら、足の先でも踏み入れようものなら殺されるから。

何故なら、動く為の歯車が幾つも幾つも抜けてしまったから。

彼女は今日も独り、太陽の畑で帰りを待つ。

>i328827|2809<

幽香の日記（後書き）

目標、幽香ヤンデレ
てな訳でしたが、どうだったでしょうか。ちゃんとヤんでくれてますかね
作者がこういうのに疎いので違う場合は遠慮無くどーぞ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1328r/

東方片編変

2011年10月13日01時06分発行